

あづこらの集い

2008.9.14~15

人の知恵と神の智慧

(三)

人の知恵と神の智慧

—自我と自己・下からの知恵と上からの智慧・啓示と理性・神と人—

松下昌義

はじめから私事を語らせていただくのは恐縮ですが、私がイエス様にお出会いたきっかけは、キリスト教会の礼拝に参加したとか、クリスチャンのどなたかにお出会いたとか、聖書を読んだとかいうことではありません。

それは、日本が第二次世界大戦で米国を中心にした連合国軍に敗北し終戦を迎えるその年、十五才だった私も「日本国民総動員令」という法律のもとで学徒動員で兵器を作る工場に配属されました。そこで工具として同じように徴用され働いていた壮年の「見知らぬおじさん」が、ある日、突然、私を呼んで、「これを、あなたにあげます」と言って手渡され、私は手に、ずしっ！と重さを感じて受け取ったのが、なんと！「お身像付きの長さ十二、三センチ程の金属製の十字架」だったのです。このとき初めて私はイエスさまにお出会いましたのです。

当時、キリスト教は敵国の宗教として日本国の教育現場では積極的には教えていませんでしたし、キリスト教会はさまざま政治的弾圧を受け、一部の牧師はその熱烈な信仰の故に逮捕投獄され、獄死した者もいたという時代状況でした。

その後、無条件降伏した日本国へ米国を中心にした占領軍が進駐し、同時に占領政策の

一環としてキリスト教の宣教師が多数送り込まれ、伝道が始まったのです。やがて、私は不思議な経過をえて、教会の礼拝に参加するようになり、伝道者になりました。後になって思うに、私が「あのとき」イエスさまにお出会いはしたことは、イエス様に招かれ、伝道者の端くれに加えていただく為のご計画の始まりだったのだと思うようになりました。以来六十余年間、多くの方々のお支えと祈りを得て、七十七歳の今日まで私はイエスさまの不肖の弟子として求道を許されてまいりました。

それにいたしましたしても、見えない神のお働きは神秘に満ちています。神さまの働きは私たち一人ひとりの計らいを超えて、どの人にも及び、その人をその人らしく生かそうと関わり続けて下さっていることに気づくとき、自分の我（が）を張らずに見えない神の働きかけに謙虚に応答出来る素直な心を持つていたいと思います。その思いとは、「神さま、あなたが私に下さる御旨を成させてください。」という祈り心を日々刻々持ちつづけることではないでしょうか。

そこで、本日は、私なりの求道でイエス様から頂いたお恵みの一端を語らせていただき、その不可思議な有り難さを皆様方と分かち合うことがゆるされるならと願っています。

本日は、時間も限られておりますので、お話の中心に直接入ってまいります。

注・1. 三年後、改革派教会長老、井上重次郎（元小学校の校長）宅の「家庭集会」

へ、ある日突然先輩に誘われ参加。その後一年して日本キリスト教団「世光教会」（榎本保郎牧師）の礼拝に参加。牧師の強烈な靈性に接し、一年後一九五一年信仰告白・受洗。一九五二年同社大学神学部への編入学を勧める牧師の推薦を断り、「教派を無くする運動をしている」という大阪聖書学院に共感を持ち入学。しかし、失望し劣等問題学生となる。一九五五年西宮甲陽園教会に伝道者として奉仕するが宣教師（説教教師）と意見が合わず退任。

一九五六年京都左京教会牧師に就任。二〇〇六年退任。

2.

☆「選び」・「あなたがわたしを選んだ（エクレゴー）のではない。わたしがあなたを選んだ」（ヨハ福音書十五章十六節）

☆「キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び（アホリゾー）えり分ける）出され、召されて（呼び出され カレオー）使徒となったパウロ」（ロマ

書一章一節）

☆「私を母の胎内にある時から選び分け（アホリゾー）恵みによって召し（カレオー）出して下さった神が……。」（ガラテヤ一章十五以下）

★「召し出す」（召命）ルターは召命という概念を聖職者や修道者に限定せず、一人ひとりが神からの使命を受けていること、世俗のただ中で従事する職業も神から受けた使命であることを強調しドイツ語の職業（ベルウッフ）は「それへと呼び出されること」（召命）を原義としている。これが近代のキリスト教的な職業観を形成する契機となった。

3. 「神秘」ギリシャ語の“ミステリオン”の語源は“目や耳を閉じる”意味がある。つまり神秘（奥義）とは、人間の知情意を超えた秘密の世界のことであり、聖書では「神の支配の秘密」（マルコ四・十一）と言われ、パウロに於いては神の隠れた意志や計画を表すようになった。

○「見えるもの」と「見えないもの」

イエスさまが教えられたことを記した新約聖書の福音書（マタイ福音書・マルコ福音書・ルカ福音書・ヨハネ福音書）を読みますと、私たちが生きて行く上で心得ておくべき大切なことが多く証示されてあります。そしてその証示の仕方は各福音書の特徴によって少しずつ異なっておりますが、共通している大切な一つを取り出すなら、それは「神の国」の教えです。「神の国」とは「神の支配」または「神の働き」という意味であると研究者は教えています。

ところが、「神の支配」とか「神の働き」などと言われても、私たちにはすぐに「分かりました!」とは言えません。なぜなら、それは「見えない」からです。作業をしている人の姿が見えるなら、どの人にもそれは何をしているのか分かります。しかし、「神の支配」や「神の働き」と言われても、何も見えません。そもそも「神」そのものが見えないのですから、誰もがすぐに納得できないのは当然と言えます。

私たちは普通「見えるものは存在し、見えないものは存在しない」と思っています。例えば、普通の細菌は肉眼では見えませんが、顕微鏡では見えます。さらに、普通の顕微鏡では見えないウイルスも電子顕微鏡ではその働きを見ることが出来ます。その意味で細菌もウイルスも「見えるもの」なのです。しかし、神の働き・神の支配・神自体はどのような科学的な器機を用いても人間には見えません。だから神も神の働きも存在しないと人は思います。

でも、どの人も、自分が人生の当事者であることを自覚し、人や物事との出会いや別れ、そしてさまざまな喜び・悲しみ・不安や恐怖を体験してくると、この世は、ただ見えるものだけが存在し働いているのではなく、見えない何かの働きがあるのではないかと、ふと！、考え思ってしまった。つまり「自分が生きる」という事が「自分の知恵や努力だけで自由に操れないそれ以上の何か神秘の働きがあるのではないか」という予感を覚えるようになります。

自分の人生でありながら、自分の願いどおりにならない、という不安やもどかしさをどの人も、感じるようになるのです。そのことを別な言葉で言うなら「人間（自分）の知力や能力の限界」をしみじみ感じるということです。しかし、そのことがすぐに神や仏を信ずるということにはなりません。ある人は、自分の思いどおりにならない人生なら、今、今を欲望のおもむくままに楽しく生きて行こう、と思う「世俗的な人」もいるでしょう。また別な人は、くよくよ考え思わず、自分の人生を引き受けて超然と生きて行こうと考え、**「諦観の人」**もおられると思います。さらにある人は、その時々**に素直に従って生きて行けばよい**と考える**「自然の人」**もいるでしょう。さらに別な人は、自分の知力体力をフル回転し、願いを**実現するのだ！**と、勇ましく生きる**「信念の人」**もいるでしょう。このように、**現実**に於ける人間の生き方は、さまざまです。そして、どの生き方が最も正しい生き方か否かという**ことは誰も軽々しく言えない**と思います。

それにしても、以上のような生き方に加えてもう一つ、自分の人生に対処の仕方があるのではないかと思います。それは、**「自分の人生の現実の有りのままの全体を素直に見る」**

ということですが。私はイエスさまから、それを“教えていただきました。

ここで、今回の講話の結論の一つを先取りして言うなら、私たちは自分を取り巻くさまざまな事柄（存在者）を対象化し、客体化し、主体としての自分の意識の枠で主観的に価値付けや意味付けすることで認識し是非善悪を判断し生きています。それは思惟されるものと思惟する自分自身とが分かれ、相対している“对象的思惟”です。このような思惟の仕方が科学的、哲学的思惟の仕方であり、日常の生活もそのような主客の関係でものごとに関わっています。しかし、そのような对象的思惟は、よく考えますと結局、全ての対象を自分の思い（主観）で抱え込み、自分の都合で認識し判断をしているだけで、そのものをそのもの自体として知ってはいないのです。結局、主客に於ける对象的思惟は“独断的思惟”、“自己中心（エゴイズム）的思惟”、“独善的思惟”だと言えます。それは、A君が自分勝手にB君を殺人者だと認識、判断して、B君に関わる場合と同じです。つまりAの主観で作り上げた幻想の客体BにA自身は振り回されているのであって、本当のBは存在していないのです。結局それはAのエゴイズムなのです。AはA自身が作ったBの幻想に勝手に踊らされているだけなのです。このように主客関係に於ける对象的思惟の落とし穴はここにあるのです。そのようなAを、神または律法との関係で演じたのが、イエス当時のユダヤ教パリサイ派の宗教家達の「神信仰」だったのです。また、聖書を直接的な神の言葉であると客体化し、主客の関係で对象的に理解する、所謂“聖書信仰”も同類です。これについては、後で一緒に考えます。

イエスさまは“对象的思惟”をなさらない。それ自体が本来在らしめられている根っこ

に即してすべてをを見られた。それを根源思考と言います。すべてこの世に在るものは、そのように在らしめている根源から生まれて存在者として在るのです。つまり、現れ出た個々のもの（存在者）の姿や形は異なっても、すべてのものをそのように在らしめ、成らしめている大いなる命の働き、即ち「根拠」「根源」の命の働きは一つなのです。それは人間の誰かが作ったものでもない、人が知ろうが知るまいが、また、人が認めようが認めまいが、既に決定されている事実なのです。その根拠に基づいて、私が在り、あなたが在り、鳥が飛び、花が咲いている、川が流れている、風が吹き大空に雲が流れている、木の葉が舞い落ちる、様々な動物たちが生きている、地球が在り、様々な星が在り、何十、何百億という星々を抱えた大宇宙が在る。このように存在の奥義に立つとき、この世は「多即一・一即多」であることに開眼する。そこから所謂「宗教の世界」が開けて来るのです。これについて興味深いのは、旧約聖書に証示されている次の記事です。

神はモーセに、「わたしはある、わたしはあるというものだ」と言われた。

— 出エジプト記三章十四節 —

ちなみに、「ある」とはヘブライ的には「成る」と一如だと研究者（有賀鉄太郎）は教えてくれます。つまり「在る」ことは同時に「成る」ことだということです。

イエスさまは、主観と客観・主体と客体として事物を見られない。即ち「对象的思惟」をなさらない。それは個物を相対的に理解することです。イエスは主体と客体が未だ相対する二つに分かれない絶対の場、つまり「対立が無い場」、存在の根拠・根源の場、命の根っこの場に立ち、その場を証示すると同時に、その場から発語された。マルコ四章二十五節以下の「成長する種の譬え」や「からし種の譬え」さらにマタイ五章一節以下の「山上の教え」等その典型です。これらについては後で一緒に学びます。

以上のような根っこの場からの思惟を私は先に、自分の人生の現実の有りのままの全体を素直に見る“と言ったのです。

現実の有りのままの全体性を素直に見るとき、その人は「神の支配と神の義を」見るのです。神の支配を見るとは、“命の全体性”を見ることです。イエスはその大いなる命の全体性を生きられ、わが身をもって証示されたのです。

それにしても、私たちは、対象的な思惟の世界に生きており、その枠内で信仰を捕らえていないだろうか。先に述べた「A君」になっていないだろうか。

注・1. 「神の国」「天国」とは神の王的支配とその支配の場の働きのことであり、

「神の支配」であるとダルマンは研究発表し学会で受け入れられた。

H・ダルマン（一八五〇—一九四一）^註ドイツの聖書学者、考古学者。パレス

チナ考古学研究所所長第一世紀のユダヤ教の言語、思想、習慣等の研究者、

イエスの日常語がアラム語であることを発表した。

○利己的自我が幻想・虚構としての宗教と信仰とを作る

思い願うとおりに生きられない、だから人生に悲しみや不安が生じ、幸福になれない、と考える。そこで、自分の願望が充たされ、かなえられるように、見えない神や仏に依り頼むことを「信仰・信心」と言い、その役割を担うのが「宗教」だと考えている人がいます。しかし宗教や信仰をそのように考えて関わることに、納得できない何かを「感じている人も多くいらっしやいます。その場合、その考え方が、正しいか正しくないか、又は善か悪か、ということではなく、私は、そこに「なにか不自然さ」を感じるので。それは、「宗教や信仰は御利益のためのものではないぞ!」という力みとは別に、「何か不自然さ」を覚えるのです。皆さんはどのように思われますか。それにしても私が覚える「不自然さ」というのは何なのでしょうか。これについて、少し考えてみましょう。

わたしが新約聖書の福音書を通して、イエスさまから学んだ一つは、聖書や神を、絶対の真理、また、絶対の抛り処と無条件に信ずるそこから出発するのではなく、むしろ「それらに関わる自己自身を見つめ、考える」ということです。

しかし、一般的には、目に見えないウルトラスペースマンのような「全能の神さま」が何処かに居て、その神に自分の求めを叶えてもらうために、精進潔斎（心身を清め、苦行難行）して神や仏にその高德を認めてもらおうとする事が「信仰・信心」とされ、また、そのように教えるのが宗教信仰であると考えられているようです。その意味で、大方の宗教教団は、「ご利益を受けるための精進潔斎の方法を、超能力者と称される教祖や聖なる教典と言われる書物等にもとづき、信徒にその方法を説き、従順に信じ従う者は「願いは叶

えられて幸福になり、救われ、死ねば天国（極楽）に行ける」と自信たっぷりに勧める。と同時に「この教えに従わなければ、あなたは不幸になり、救われず地獄に行く」と脅迫してみたことを説くことが多々あるようです。その結果、信徒は金品を巻き上げられ、家庭が崩壊してしまうことも起こる、が、それでもその宗教や教祖を信じつづける哀れな人々もいるようです。勿論、すべての宗教や信仰がそれであるとは言えません。真面目（まとも）な宗教や信仰も多くあります。

しかし、それらの宗教や信仰に於いて共通していることは、目に見えない神があり、その神を全能と信じる人間がいる、という神と人間との関係で宗教も信仰も成り立っているということなのです。

このような「神と人間との関係」を、よくよく見つめると、そこで成り立たせている「宗教や信仰」の内容の主体（主人）は、真の意味での神からの出発ではなく、人間の願望からの出発だ、ということなのです。言い換えると、そこでイメージされる幸福や神は、その者が描く幸福であり神である」と言うことです。つまり、人が勝手に描く幸いな在り方を叶える全能の神を、自分で要請（造形）したにすぎません。それは、自分に好ましい自分のありようを思い描き、そのような自分を実現するための手段として神を造形（要請）したこととなります。結局、そこで生み出される「宗教や信仰」「神」は、すべて人の願望が生み出した幻想であり虚構であるということなのです。この人間の自家製の神を「偶像」と言うのです。

ここで注目すべき一点は、このような偶像を生み出すのが「人間の利己的な存在それ自

体である”と言えます。そして、この、“人間の利己的な存在それ自体”のことを私は、「歪んだ自我」と申しています。これについてイエスさまは次のように言われた。

あなたたちは皆、わたしの言うことを聞いて、悟りなさい。……人間から出て行くもろもろのものが、その人間を穢すのです。……すべて外から人間の中に入って来るものは彼を穢さない。なぜならば、それは彼の心の中にはいるのではなく、腹の中に入って便所へと出てゆくからだ。……人間から出て来るもの、それがその人間を穢す。なぜならば、人間の心の中からこそ、悪い想いが出てくる。つまり、淫行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪意、詐欺、放蕩、嫉妬、高慢、無分別などだ。これらすべての悪は、心の中から出て来て、その人間を穢すのです。

—マルコ福音書七章十七節〜二十三節—

ここでイエスさまが示される「悪い想い」の一つ一つに注意を向けるのではなく、それらは「人間のエゴイズムが生み出す問題」即ち「歪んだ自我」が生み出す問題として受け取らねばなりません。なぜなら、エゴイズムとは、“自己中心の知性”の作り出す人間の在り方だからです。“私は私によって私である”、“私の主人（根拠）は私以外にありません”というのがエゴイズムの在り方の基本です。このような自我の在り方は歪んでいます。またとても“不自然”に思います。

「歪んだ自我」が作り出す一つが「偶像神」です。“偶像”とは何なのでしょう。旧

約聖書に於ける「偶像」はヘブル語の「切り出す」という意味の言葉から生じたものだ。と研究者は言います。つまり石や木から切り出して造られた像、特に神の像のことです。問題はそれを人々が、神として礼拝し、全能者として祈り、自分が依り頼むべきもの、とすることです。その問題性をさらにもう一步深く反省的にみると、そもそも「神」というものは、「人間が充たされない願望を充たしてくれる者として、超越世界に投影したものである」また「人間の本質を理想化したものにすぎない」さらに、「その意味で神学は結局人間学である」とキリスト教の「神」を徹底的に批判したのはドイツの宗教学者フオイヘルパッハ（1804年〜1872年）であったことは歴史的に周知のことです。はたしてキリスト教の神が厳密にそのような神であるか否かはともかく、一般的な意味で多くの人々が神として崇めている「神」がそうでないとは言えないと思います。

例えば、神を「全能であり、いかなることも成しあたわぬことなきお方」と言うとき、その「神」を「人間の類的本質の無限の力持ち」としてイメージされているなら、それは人間と横並びのウルトラスーパーマンになってしまいます。その比較は幼児と相撲の横綱との力の量的差にすぎません。それは真の意味で神ではなく、「力持ちの超親切なおじさん」である。

では真の神とは何か。それは人間にとって「無」としか言いようのない。否、「無」としての神を語るとき、すでにその神は人間の意識の内て捉えた神にすぎません。ですから「神は見えない方」と言うとき、それは「見えるもの」ということを前提にして神を「見えない方」と言表しているわけで、そのような神も、既に人間の観念の中で作り出された

相対的な「神」だといえましょう。この論議は一応ここで置いておき、要するに「神」は人間と横並びにいる超力持ちの一つでは無いということです。ともかく、人間はその心の内から無限大にあらゆる観念の産物を生み出すのです。そして自分で作った観念の産物に自分が振り回され続け、最後はそれ等が幻想であり、虚構にすぎなかったことに気づく。すべて「歪んだ自我」の内から作り出したものを、窮極的な依り処とするなら、最後に必ずニヒリズムに陥る。

ここで想い出すのは天下人となった豊臣秀吉が残したと言われる辞世の句です。

露とおき、露と消えぬるわが身かな、なにわの事も 夢のまた夢

このように「歪んだ自我」は、その信仰や求道に於いても、自らの本当の根拠を自ら覆い隠してしまう。そのことをイエスさまは「人間から出てくるもの、それがその人間を穢す」(マルコ七・二〇)と言われた。

歪んだ自我は、自我保身のために虚構・幻想としての神や宗教や信仰を無限に作るのです。歪んだ自我は自身の生の根拠は自分だと信じていますから、絶えず自身の知恵と力で、自身の生の根拠、即ち安心と支えとなるものを作りつつづけることによって不安を紛らわし解消しようと無意識の内に思っているのです。

事実、人間は自己保身のために神も仏も善も悪も平和も戦争も正義も科学も政治も自然も、地球や宇宙までも、何の躊躇(ためらい)もなく自我の内に抱え込んで、自らの命に平安と安心とを得ようとする。歪んだ自我は、自分の命の根拠(根元)が自分の内には無いということを知らない。つまり「自分は自分によって自分なのでは無い」ということを

知らない。いつまでも、「自分は、自分によって自分なのである」「自分の主人は自分である」と思い込んでいる。イエスさまはこの生き方、在り方を「今、『見える』とあなたたちは言っている。そこに罪がある」(ヨハネ9・40)とパリサイ派の信仰人に言われた。しかし、その言葉は「我らこそ最も正しく敬虔で熱心な信仰人」と自認する彼らには通じなかった。

このような「歪んだ自我」が生み出した虚構と幻想で人間自身が振り回され、遂に自らを滅ぼしてしまうのなら、ただの喜劇ではすまされない。今日、人類は地球規模で破壊の危機に向かっています。

聖書が言う「罪」とは、単なる個々の倫理的な違反という次元のことではなく、「歪んだ自我の在り方」即ち「*ego*イズムと知性」の歪みそのものであると言える。このような人間の在り方は「不自然である」と言う他ない。

ここで「歪んだ自我」の現象の一つの例を福音書の記事から紹介しておきます。

群衆の中のある者がイエスに言った。「先生、私の兄弟に、遺産を私と分けるように仰ってください」。イエスは彼に言った。「人よ、誰が私をあなたたちの上に裁判官や分配人として立てたのか」。そしてイエスは群衆に向かって言われた。「心してあらゆる貪欲に警戒せよ。たとえ財産が有り余るほどにあつたとしても人の命(ゾオエ・生かす原動力)は彼の財産から出てくるものではないのだ」。

—— ルカによる福音書十二章十三節以下 ——

イエスは財産の話をしておられるのではない。この世で生きてゆくうえで、財産は人にとって大切なものだということは、誰もが知っている。問題は自分の身体という財産も含めて、それとどのように関わるか、ということですよ。イエスはその関わり方、つまり生き方の根拠を語られたのです。ここに登場する者に「自分の生きる根拠が歪んでいる」「ことをイエスは指摘なされ、共に集っていた人々に向かって「自分の真実の根拠に気づけ！」と諭されたのです。「命(ゾオエ)」とは生かす原動力であり、既に設えられているコト即ち恵みとしての被決定です。しかし「財産」は設えられた人間の自己決定の内にある物です。つまりゾオエ(命)は人間が生きる元、即ち一であり、財産は二なのです。この順序を混同し誤ってはならない。しかし「歪んだ自我」はすべて自我で抱え込む。ここに「歪んだ自我」の根本的な歪みがある。

遺産の分配で不利益を被っている彼は、有利に解決してもらうためにイエスのもとに来た。しかしイエスは彼の訴えの歪みを是正した。人は神の恵みを説くイエスの、その行為は不親切であると思うかも知れない。また、財産分与の問題はこの世のことであるからイエスは拒否なさったと思うかもしれない。しかし、そのようにイエスについて考えるとき、既にイエスに対する誤解がはじまっているのではないだろうか。

イエスは単なるヒューマニストでも、ただのお人良しでもない。また、一つの主義主張に生きる熱狂者でもない。イエスは人間を人間として真っ当に生かす根拠を何よりも大事とした。人間を人間として生かす根拠、即ち「神の支配と神の義」とを何よりもまず求めなさい、と語った。

……思いわずらうな。……何よりもまず、神の支配と神の義を求めなさい。そうすれば……増し加えられる。

——マタイ六章二十四せつ以下——

イエスは歪んだ自我の観点から人生のさまざまな問題に対処治療をなさったのではなく、「真つ当な自我」の立場から根本治療・根幹治療を提示なさる。私たちが思いわずらうのは、自分の生の根拠をもっていないからです。「自分の生の根拠は自分である」と確信している「歪んだ自我」は、自分の生の確かな根拠を作らねばとお思いわずらい不安の中に生きています。その人間に「まず神の支配を求めなさい。そうすればみな加えられる」とイエスは呼かけられる。(マタイ六・三三)これは、対処治療ではなく根本治療・根幹治療である。歪んだ自我ではなく「真つ当な自我」の叫びである。

イエスに訴えた者の大きな誤りは、イエスを「自分の願望を充たす者に仕立て上げた」ところにある。「誰が私をあなたたちの上に裁判官や分配人として立てたのか!」と。「立てた」とは「自分が願うように仕立てた。そのように作り上げた」という意味です。ここでの問題は、財産の分配うんぬんが主題ではない。イエスを自我の中に抱え込み、イエスよって自分が願う自分を立ち上げようとする「人間のエゴイズムと知性の在り方」即ち「歪んだ自我」が問われているのです。ですから、「人の命(ゾオエ)は財産から出てくるものではないのだ」と言われ、つづけて愚かな金持ちの話を群衆にイエスさまは語られた。

ある金持ちの畑が^{豊作}策だたった。金持ちは、「どうしよう。作物をしまっておく場

所がない」と思い巡らし多か、やがて言った。「こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、こう自分に言ってやるのだ。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。一休みして食べたり飲んだりして楽しめ」と。しかし神は、「愚か者よ！、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったい誰のものになるのか」と言われた。自分のために富を積んでも、神に対して富まぬ者はこのとおりだ。

— ルカによる福音書十二章十六節〜二十一節 —

ここでもイエスさまは財産について語っているのではない。問題は、財産とどのように向き合うか、その人の生き方の根本的な在り方を問うておられるのである。その意味で、この世で大切な財産とは自分の身体も含めた“この世の物すべて”即ち“地上の富”全体のことです。その富と、どのように向き合うか、即ち「富」を自分の人生の何処に位置づるかということである。それは自我の務めなのです。船でいえば船体と積荷とは富であり、操舵手は自我だといえます。操舵手は船長ではありません。にも関わらず、船全体を自分の思う通りの方向に進ませ運転するなら、その操舵手は“歪んだ操舵手”です。なぜなら、船長を無視し独走したからです。船全体は船長即ち神の配慮の元にあるからのですから。

何度も言うが、“歪んだ自我”は自分の主人は自分だと信じおり、自分で自分を抱え込む。そして彼は言います。自分で自分を抱え込まなくて、誰が自分を支え生かすものがあるだろうか、と。彼は自分がどれほどの者であるかを知らない。彼は自分の生(命)の根

抛が神であることにまったく気づいていない。ここでパウロの言葉を思い出します。

兄弟たち、私は彼ら（パリサイ派の律法主義者達）が救われることを心から願ひ、彼らのために祈っています。

私は彼らが熱心に神に仕えていることを証しますが、この熱心さは、正しい認識（神の支配と神の義についての認識）に基づくものではありません。なぜなら神の義を知らず、自分の義を求めようとして（歪んだ自我を押し立てて）神の義に従わなかったからです。

—— ロマ人への手紙十章一節〜三節 ——

話を「愚かな金持」の譬えにもどります。

この金持ちの「愚か」さとは何なのでしょうか。それは「人の命が財産（人の知識、知恵を含めた一切の所有物）から出てくるのではない」ということ、つまり、命（ゾオエ）の本当の根拠に気づいていないことです。又「自分のために富（知識、努力、物、誠実、信仰、求道、経験）を積んでも、神に対して富む（自己の命のほんとうの根拠）ことを知らなかった」ことです。否、自分のために富を積むことに専心することが、自分を成り立たせるすべてなのだ、という確信、そこに愚かさがあるのです。富は大切です。が、富はその者にとって有効、有意義にさせている命の根拠を忘れてはなりませんよ！、とイエスは言われる。先の、熱心宗教集団パリサイ派へのパウロの批判の言葉を用いるなら、「この熱心さは、正しい（真っ当な）認識に基づくものでなく、神の義（命の言動力）を知ら

ず、自分の義（自分の原動力）を押し立てて、神の義に従わなかった」と言うことです。結局、彼らの信仰や求道は「歪んだ自我」の枠内に留まったそれであったといえる。

注・1. 「神の義」とは、神の義であって人間の正義とは異なる。人間のどのような

行為からも神の義は生じない。神の義は、神の静的な属性ではない。神の救済的意志の一方的、且つ強烈な遂行であり、それを、人間は、ただ信仰だけで受けるしかない、とロマ書をとおして悟ったルタ―は正しい。ただ、その神の義が、イエス・キリストに於いて初めて啓示された、とするパウロの福音理解を継承する所謂、伝統的キリスト教会の「神の義」理解は、イエスの視点から見るときいかなものかと思う。つまり、そこからキリスト教唯一絶対主義が生じてくる。問題は「神」とは何かということだ。

「福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力（ドユナミス）だからです。福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。『正しい者は信仰によって生きる』と書いてあるからです。」

—□—マの信徒への手紙一章十六節・十七節—

尚「神の義」と「神の支配」とは、その作用的な内容は同じである。また、

「福音」もその「神の義」を内容とするものと理解出来ます。

2・「啓示」(アポカリプス、覆いを離す) 神自身が自ら自分の覆いをとり、自らを人の前に現すこと。だから「啓(ひらき)」「示(しめす)」と漢字記す。尚、聖書(聖典)をとおしてイエス・キリストに於いてのみ神は自身を現し示した、という宗教がキリスト教であり、「唯一神教」の立場である。このような啓示について神学するのが「啓示神学」であり、その内容はプロテスタントに限って言うなら、聖書の中心性を強調したのがルターであり、同時に特殊啓示(聖書)と一般啓示(自然)の双方を認めるのがカルヴァンである。そして人間理性も啓示の媒体として認めるのがカルヴァン自由意志論の立場に近づいていったのがメランヒトンです。

二十世紀最大の神学者であり世界の神学をリードしたK・バルトの立場は聖書に於けるイエス・キリストの出来事を(父・子・聖霊)唯一の啓示とし教会の伝統や文化、歴史などを排除した。(自然神学の絶対的否定・ブルナーとの論争)しかし、一九六〇年代よりバルト神学は衰退しポスト・バルト神学が生まれ、伝統的キリスト教そのものが崩壊、カトリック教会を含めて今日、キリスト教会は改めて「啓示と理性」「神と人」との関係の再構築を求められ、苦悩している。本講話もその問題と基本的に関わることであり「あごらの集い」の問題意識もここにある。

○イエスにとっての神と信仰―「神の支配と神の義」を基本として―

イエスさまが証示されたことを福音書に於いて注意深く聞いておきますと、それは、人が人らしく（人が本来の自己の全人格的な在り方を）生きて行くうえで大切な心得だと領解できます。その大切な心得が「神の支配」に気づくことです。

では「神の支配」とは何なのでしょう。この項では「神の支配」を中心にしてイエスが説く神や信仰について一緒に考えてみましょう。

「神の支配」について、イエスさまは多く語っておられる。否、イエスの証示のすべてが「神の支配」であったと言っても過言ではありません。しかし、それについて直接に譬えで語られた一つがマルコ四章にある「成長する種の譬え」です。

イエスは言われた。「神の支配は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに（自然に）実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そして穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。

―マルコ福音書四章二十六節―二十九節―

このイエスさまの語りは「神の支配」について、とても分かりやすく教えておられます。先ず知っておかなければならないことは、「神の支配」とは、「働き」であるということです。その場合、「神」という実体が存在して、その「神」が「支配している・働いて

いる」ということではありません。この一点をしっかりと領解しておかなければ、神を存在の一つに、つまり先に述べました人間と同じ横並びの“全能者のおじいさん”にしてしまいます。さらに「神の支配」という実体が固定的に何処かに在るのではなく、又、象徴概念として観念的なものでもありません。それは、“働き”“命のたぎり”として躍動している「コト」“なのです。つまり“人間の命”は、だれも対象的な存在物として客観的に提示することはできません。言葉でも説明できません。なぜなら、その「命」は“働き”だからです、同じように“働きとしての神の支配”は言語（知性）によって対象的な「モノ」として客観的に提示できません。ですから、イエスは「譬え」で証示された。しかし「譬え」はやはり「譬え」であって、それ自体真理ではない。なぜなら、譬えも、人の知情意の内に持ち込んで、言語以上の世界を証示しようとする人の作業なのです。その言語以上の何か、とは神秘であり、厳密な意味で“不可思議なコト”です。私たちはその神秘に、知情意（言語）を超えた神秘としての靈的な促しによって気づかせていただくしかありません。その意味で、譬えは靈的な命の世界の表現言語ですから、その表現に秘められた世界（命）は靈知よって受け取り解釈しなければなりません。パウロはそれについて思いめぐらし、神の意志、キリストの意志の働きとして「靈」という古典的な表現を用いたように語りました。「“靈”は一切のことを、神の深淵さえも窮めつくす」と。

（コリントー、二・十）

このパウロの告白は「歪んだ自我」に生きる人間の根本的な問題がどこにあるのか、ということを自らの直接経験をとおして語る証示の中の一節です。少し長いですが大切なこ

となので一緒に彼の告白を聞いてみましょう。

兄弟達、私もあなた方の所へ行つた時、神の秘められた計画（神秘）を宣べ伝えるのに単なる言葉や知恵を用いませんでした。なぜなら、私はあなた方の間でイエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も語るまいと心に決めて行つたからです。そちらに行つた時、私は衰弱していて、恐れにとりつかれ、ひどく不安でした。私の言葉も私の宣教も、人の知恵の説得力による言葉によるのではなく、**“靈”**と力の証明によるものでした。それは、あなたがたの信仰が、人の知恵によるのではなく、神の力（ドユナミス）によるためです。

しかし、私たちは、信仰に成熟した人達の間では知恵（ソフィア）を語りません。それはこの世の知恵ではなく、また、この世の滅び行く支配者達のものでもありません。私たちが語るのは、神秘の中に隠されていた神の知恵であり、神が私達に栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられたものです。この世の支配者達は誰一人、これを知る（ギノスコー・気づき悟る）者はいませんでした。もし、気づいていたら栄光の主を十字架につけはしなかつたでしょう。

私達には、神が**“靈”**（ブニウマ）によってそのことを啓示（アポオカリフス）してくださいました。

人の内にある靈以外に、いったいだれが、人のことを知る（ホイダア・見抜き認識し悟っている）でしょうか。同じように神の靈以外に神のことを知る（ギノスコー・

経験の中に取り入れる)ものはいません。私は世の靈ではなく神からの靈を受けました。それで私は、神からの恵みとして与えられたものを知るようになったのです。そして、私たちがこれについて語るのは、人の知恵に教えられた言葉によるのではなく、「靈」に教えられた言葉によつています。つまり、靈的なものによつて靈的なことを説明するのです。血肉の人(プシユキコス・知情意の人、靈的でない人)は神の靈に属する事柄を受け入れません。その人にとつて、それは愚かなことであり、理解できないのです。靈によつて初めて判断(アナクリノ・吟味し尋ね調べる)出来るからです。靈の人は(ブネウマテイコス)一切を判断しますが、その人自身はだれからも、理解(アナクリノ・正しく調べ、正しい判決)されない。

—コリントの信徒への手紙一・二章一節〜十五節—

ここで、パウロが語っていることは、極めて宗教的です。つまり「神の支配」に私達が開眼するためにはこの世の論理(その極めつけが哲学)では通用しないのです。一般的に言つて人間の知性(理性・悟性・感性)によつて超越者の働き(神や靈)は解明できないのです。それはいみじくも、パスカルが言ったとおりです。「理性の働きは、理性の限界を知ることにある」(パンセ)。この度の私達の学びの表題で言うならば、理性は所詮「下からの知恵」であり、「歪んだ自我」を支える知恵に過ぎません。それに対して、靈的な世界は「上からの知恵」の世界であり、それに気づいているのが「真つ当な自我」なのです。即ち「上からの知恵を啓示」「下からの知恵を理性」というなら、この「啓示と理

性の関係」即ち「神の知恵と人の知恵」とを、どのように結ぶかということとは、人間存在の一大問題だといえましょう。つまり「神の知恵」にのめり込んでしまつてはならず、同時に「人の知恵」だけを振りかざすだけでも、人は人らしく生きては行けません。即ち、人が本来の自己の全人格的な在り方はのぞめません。このところをしっかりと認識し領解しておかないと、人生の「魔」、宗教の「魔」に陥ちこむことになります。ここに「人間と宗教」が真剣に問われる理由があるのです。

ここで一言「神の知恵」と「人の知恵」のいずれを取るか、信仰は「あれか・これか」の決断である、と次ルケゴールの質的相違の弁証法という影響を受けたバルト神学の流行の中で盛んに論じられ、私も若いころ厳密に理解しないままに他者ではなく、自分自身に「信仰は決断である」と説得し、すべてが解決したかのように思い込んでいました。

確かに、人の知恵を振りかざして人間はルネッサンス以来ヨーロッパ近代の合理主義を信奉し世界を構築してきました。しかし、その人間中心主義、知性中心主義、主観主義的合理主義は様々な恩恵を人間にもたらしましたが、結局、行き詰まりに突き当たり、人間性を歪め、人間としての精神世界（心の世界）に飢えをもたらし、本来的な人間（自己）の全人格的な安心を奪つてしまひ人間世界に殺伐なる状態をもたらししてしまいました。即ち「歪んだ自我」が闊歩する社会になってしまったのです。ところが、その反動として、人々は近代合理主義を否定することで「神の知恵」を蘇らせたのです。所謂「精神世界」の流行です。それを一括して言えば一九八〇年以降に欧米で生まれてた「ニューエイジ運動」です。島蘭進によればその内容は、自己変容あるいは靈性的覚醒の体験による自己実現。

宇宙や自然の聖性との一體性の自己表現。死後の生への関心。感性・神秘性の尊重。靈性と科学との統合。エコロジ―や女性原理への尊重。水晶・音・香・場所等が持つ神秘力。輪廻転生とカルマの法則。地球外知的生命との接触……これらの一例としてジエムス・レッドフィルドの「聖なる予言」は一九九三年に刊行され六年五月の三年も経ない間に世界で五三八万部も売れたといわれる。日本でも忽ち二十二版、文庫版初版等二十万部売れてベストセラ―になった。そこでは「靈性」が中心であり、「宇宙エネルギー」「意識の進化」「チャネリング」等、さらに、「氣功」「輪転生」「臨死体験」、さらに「占星術」「風水」……とにかく人々は一気にこのような世界に関心を向け、中にはそれを利用して利益を貪ろうとする怪しげな疑似宗教集団が「宗教ではありません」とふれこみ人々をたくみに集めているのも多々今も暗躍しています。

一方、キリスト教の世界でも、確実に「キリスト中心主義」が一九六五年から衰退しはじめ、同時に「イエス中心主義」も下火になり、「神秘主義的キリスト教」が台頭してきました。つまり「人の知恵」から「神の知恵」へ、という構図を知って頂きたかったです。それが証拠に「キリスト教神秘主義著作集」十七巻が日本を代表するキリスト教出版社教文館から出版したのです。しかし、このような神秘主義の台頭が単なる近代合理主義にたいする反動として生まれてきたのであれば、それは過去の歴史の反復であって意味はありません。つまり、「あれ」に対する単なる「これ」であれば、またいづれ「これ」は「あれ」に転ずるだけです。そうではなく、近代合理主義の問題性を徹底批判し反省したそこから新しい神秘主義の台頭でなければ成らないでしょう。

それにしても、信仰は「あれか・これか」ではなく、また「あれも・これも」でもない、「あれ」が同時に「これ」である、という逆説的な在り方をイエスに於いて学び取ることが出来るのではないかと思えます。単なる人の知恵にも溺れず、また単なる神の知恵と言われるものに溺れない、しかし、それを滝沢克己氏的な分節の言表を用いれば、人の知恵と神の知恵とは不可同で、同時に不可分、だがそれは不可逆（一と二とは逆に出来ない）の在り方、即ち自己成立の根柢に臨在する「神人一体の原関係」こそ、イエスが提示した人と神との関係性ではないかと思う。この事実（リアリティ）に直接開眼した自我が「真つ当な自我」なのです。

さて、話をもとに戻し、イエスさまが語られた「成長する種の譬え」に目をむける前に、もう一つ確認しておきたいことがあります。それは、イエスが「神」や「聖霊」や「キリスト」（パウロの言葉）と言つ言葉を語るとき、それらは固定的な実体としての「神」・「聖霊」・「キリスト」というモノが存在しているということではありません。そうであればそれ等は人間にとって客体的、客観的存在（個物）の一つ、即ち相対的なものの一つにすぎなくなります。ですから神も聖霊もキリストも、人間には掴みどころがない「動」であり「コト」なのです。それは「名詞的」でなく、「動名詞・動詞てきコト」です。このことを直接経験したパウロは、さすがに体験的に知っていて、「神の支配はただの言葉の内にあるのでなく、力（働き・ドユナミス）の内にあります。」と看破しています。（コリントー・四章二十節）

力（ドユナミス）とは、「必ず実現させる神の大いなる命の働き」を言うのです。すで

に学んだとおり、「神の支配」を証示する「成長する種の譬え」は、農夫と大地に蒔かれた種の成長と成った実の収穫という、驚くべき、且つ神秘的な「ひとりで成る」命の働きの一点を提示しています。つまり、種が成長して実がなるというコト、即ち「神の支配」は、神の絶対的且つ一方的なデュナミス（働き）であって、そのコトは農夫（人間）の関与に超絶しているのです。この事実をイエスは「農夫（人間）が夜昼、寝起きしているうちに」「どうしてそう成るのか、その農夫（人間）は知らない」と言われる。そうして種が成長して行くのは「ひとりで」（自然に・アウトマテイ）成る」。さらに注目すべきは農夫（人間）がそこで関わるのは「種に実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫のとの時が来たからからである」。

このイエスの譬え話は何を証示しておられるのでしょうか。端的に言えば、人が生きている、万物が生きているという、このまぎれもない眼前の事実の命の営みの究極的な支は、人間の知恵や努力や意図には、まったく関係なく、人間の一切の努力や配慮に超絶している「創造的な大なる命の働きが、ひとりで（自然）に成らしめ有らしめ、現成せしめる」ということである。この働き、つまり、人間の一切の知識、知恵・経験、こちら側の考えとか働きに先立って、それをそれへと「有らしめ、成らしめる」創造的な命の働きがあるということ。この命の働きそのコトが、有ると成るとの基礎であり根拠であり、人間存在の根本規定なのです。それを「神の支配」とイエスは言われた。

ここで、確認しておきたい大切なことは、神の支配は「有らしめ、成らしめる創造的な命の働き」であると申しましたが、その、有らしめ成らしめる命とは、「一切の生死を含む

働です。言うならば、生まれさせても下さるし、生かせても下さる、そして死なせてもいただける働き”のことです。つまり、神の支配は生だけの根拠ではなく、生と死の根拠でもある。つまり、生も死も創造的な命のたぎりの姿なのです。ですからイエスは言われた。「二羽の雀は二十円で売られるではないか、その一羽さえ、あなた方の父（神）なしには、地で消滅することはない」（マタイ・二十九）と。「神の支配」は一切に先行する絶対的な決定なのです。それに対し人間が成し得ることは「ただ受けるだけ」という自己決定“がゆるされた存在なのです。「実が熟すと、早速 人は鎌を入れる。収穫の時 来たからである」。これは何と有り難く、美しく、感謝に充ち希望に充ちた姿である。ここに、イエスが言う「思い煩うな」という命の秘儀がある。それはまさに「限界点即自由」の歡喜すべき命の世界である。

このような、命の根拠である「神の支配」は、その人が神を信じているか、信じていないか。何時も祈り感謝しているか、いないか。どれだけ善行をしたか、しなかったか。お寺や教会にお参りし、礼拝をしたか、しなかったかなどは、まったく別に、どの人も初めから無条件に神の支配の内に居り、神と結びついているのです。その事実の証しが「人が在る」。私が今、在る」という現実なのです。ですからイエスは言われた。

パリサイ人たちに、神の支配はいつ来るのかと問われ、イエスは言われた。「神の支配は、觀察されるようなさまでくることはない。人々が『見よ！ここだ』とか、『あそこだ！』などと言えない。なぜなら、見よ！神の支配はあなたたちの只中で躍動

している（エントス）のだ。

——ルカによる福音書十七章二十節・二十一節——

神の支配は対象化して論じられ語られる客観的なものではない。つまり、聖書に書いてあるからそうなのではない。聖書に書いてあるのが無かるうが、自己成立の根柢に初めから臨在する神の絶対的な支えそのコトなのである。この神と人との結びつきが第一であり、この神人一体の原関係を証示するのがイエスであり聖書なのである。その意味でイエスも聖書も洗礼も聖餐の祭儀もすべて第二なのです。イエスも聖書も祭儀も世界内の相対的なモノであり、決して絶対的なモノではありません。しかし、「神の支配というコト」は世界内を超絶し、世界内てき存在の人間が知っているか否か、認めているか否かにはまったく関係なく、初めからそうであるからそうなのだという存在の根本的な定めなのです。

私が人間であるか無いか、男であるか女であるか、日本人であるか否か、という以前に、私という存在が今の私であったという事実は、私を超絶している神の支配の定めなのです。ですから、私たちはこの第一のコトとして与えられ設えられた「わたし」を私としていただき、それに相応しく生きて行くことが私に与えられた自己決定の責任なのです。それはどこまでも第二のことです。にも関わらず「わたしは私によってわたしなのである」というなら、その自我は「歪んだ自我」となる。それは相対の絶対化です。人間の自我は所詮相対的な「世界内存在」なのですから。

神の支配はあなたがたの中で初めから創造的に躍動し、たぎっている。とは、よくよく考えると恐ろしい命の営みです。すべてのものを、それにふさわしく、それたらしめようと

する創造的な命の営みが、個々の内で躍動し、たぎっている。しかも、その当の者が知っても、知らなくても、農夫（人間）が知らない間に実を熟させるように“創造的に躍動し、たぎる命の場に万物は在る、だから成るのです。この事実が、人間の生の根拠であり、神の支配なのです。ですから人は絶対に、自分の命の根拠は自分ではない。

このような「神の支配」の現実を自我（わが身）に熱く覚えるとき、「神」とは何でなにかということが自然に領解されてくる。

「天は神の御座、地は神の足台である」と。イエスは言われた。（マタイ五・三四）イエスにとって、天も地も神の支配の働きが充足している場なのです。と言うことは、人間の一切の考えや思いや努力に先立って万物が生き活きと生きて行けるように設えられている場、それが神の支配の場、即ち、今わたしが、あなたが生きている此処、なのです。自己自身を含めた此処は、神の支配、即ち神のそのドユナミス（創造的な命のたぎり）が場として躍動しているのです。イエスにとって「あなたの内」肉体も精神も含めたそれが在る「此処が」神の働きがたぎる場なのだ。場があって、そこに神の命がたぎっているのではない。場それ自体が神の命が躍動し、たぎっているのです。

創造的に場として躍動したぎっている命そのコトをイエスさまは「天の“お父さん”」と言われた。この呼び声は、なんと懐かしい響きであることか。「過去は新しく、未来は懐かしい」というインドのことわざがあるそうだが、「お父さん」と言うイエスの呼び声の響きは、懐かしくもあり、新しくもある。まさに“隠れたる生ける真理”への全人格的なイエスの信仰が生々しく伝わって来ます。まさに「神」とは、人格的に死んだ者の靜的、

概念的、教条的な神ではなく、人が死んでも生きても、その者の今、今の“此処”で創造的に躍動し臨在し支え保持し完成させてくださる命のたぎりなのです。まさに、その現実には“お父さん”と呼ぶにふさわしいのです。

お父さんは悪人にも、善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも、正しくない者にも、雨を降らせてくださる。——マタイによる福音書五章四十五節——

たしかに、イエスの宣教の主題は「神の支配」です。なぜなら“人間存在の根拠”“人生の窮極の支点”だからです。また“万物を創造的に活かす大いなる命のたぎり”だからです。その大いなる命の働きが、我々の内と外とで創造的に躍動しているにも関わらず、歪んだ自我に生きる人間にとっては“隠れたる生ける真理”と化しています。「目があっても見えないのか！。耳があっても聞こえないのか！」と嘆かれた。

イエスは言われた。

思い悩むな。……空の鳥をよく見なさい（エンブレポ・悟りなさい）。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めることもしない。だが、あなたがたの天の父さんは鳥を養ってくださる。……野の花がどのように育つか、よく見つめ（カタマンサノ・注意深く見る）なさい。労することもせず、紡ぐこともしない。しかしわたしはあなた方に言う、栄華の極みのソロモン王ですら、これらの草花の一つほどにも装っていない。今日、生きていても明日は炉に投げ込まれる野の草花をも、神はこのように装

って下さるのであれば、あなたたちをなおいっそう装って下さらないはずがあるか。だから、思い悩むな。……何よりも先ず（第一に）神の支配と神の義とを求め（ゼエテオ―尋ね出し）なさい。

―マタイ福音書六章二十六節以下―

ここでもイエスは「神の支配」の創造的な働きを証示しておられる。そして「悟りなさい」「注意深く見抜きなさい」と言われる。鳥や花の成長の裏に「神の支配・働き」が宿っていることを悟りなさい、と言われる。花が美しいか、何種の鳥かなどと詮索する前にまず何よりも「神の支配と神の義」とを、そのものから尋ね出せ！、と言われる。

神の支配と神の義とを「求めなさい」と一般には訳されていますが、ただ「求めよ」だけでは当惑するばかりです。そうではなく、鳥や花の成長の裏に隠されている創造的な「神の支配・働き」を尋ね、捜し追い求める、求道の姿勢をイエスは私たちに迫っておられるのです。

では、「神の義」とは、何なのでしょう。また「神の支配」との違いはどこにあるのでしょうか。

「義」とは、聖書の世界では律法との関わりに於いて、神の審判の時に義人として持つていなければならない在り方、即ち、神と人との契約のしるしである律法を守るといふことです。つまり、義人とは律法を遵守して生きる者の事です。その代表的な人がファリサイ派の人々、つまり律法主義者です。ですから「神の義」とは人間の滅びと救いとを貫徹する神の力と働きのことをいふのです。滅ぶ者にとっては恐怖であり、救われる者にとつ

ては歓喜なのです。

しかし、ここで滅びと救い、義人と罪人とを判定する尺度は「律法」です。その律法理解が律法主義者であるユダヤ教の指導者、特にパリサイ派や律法学者とイエスとは異なっていました。

それにしてもイスラエルの宗教に於ける「律法（トーラー・ノモス）」とはモーセを通してイスラエルの民が神と契約した内容が言語化したものです。つまり、イスラエルに於ける「律法」は、神との「契約」に基づいて出来上がったものですから、この「契約思想」を知らないままで、彼らの「律法・信仰」は正しく理解出来ません。ここでは詳しいことは語れませんが、「律法」理解にとつての基本なことなので少し述べておきます。

旧約聖書によりますと「律法」は基本的にモーセを通して与えられたと言われています。それはシナイ山で神がモーセに顕現して、石の板に記され与えられたのが「十戒」です。それを「シナイ契約」と言われています。

イスラエルに於ける「契約を結ぶ」ということは、単なる神と人との約束、というものではなく、「神と人との平和で秩序ある共存の合意である」と研究者は言います。イスラエルの族長アブラハム・イサク・ヤコブ達やモーセに或る時、神が現れイスラエルの神となり、民は神ヤハウエの民となるという合意、つまりイスラエルが律法を守って生きるなら、必ずイスラエルを祝福し守る。律法を破れば神の怒りと罰が下る、という合意が成立した歴史的な出来事なのです。つまり民が安心して生きて行くためには律法を守るという義務を神に対して負ったと言つてことです。つまり民の救済の根拠は神との契約にあ

り、その契約の内容が「律法」だったので。ですからイスラエルに於ける神と人との契約によって生じた律法を守るということは、極めて宗教的・神話的な事柄であって、人間の合意によって制定した(律法)ではない。又、普遍的な人間性に基づく倫理でもありません。言わば或る地域の文化として生み出された宗教的神話の一つだといえます。しかし、その民にとっては伝統的なものであり、その民のアイデンティティ(その民がその民であることとの確認の原点)だと言えます。尚、贖罪思想もこの神とイスラエルの契約と律法理解の文化的な背景から生まれて来た一つの宗教的な神話であると言えます。(ここで、注意しなくてはならないのは「宗教的神話」と言う場合、単なる宗教が作る「おとぎ話・夢物語」ではなく神話は「存在の秘密」を証示する深い物語のことを指します。)

イスラエルにとっては神との契約を守ることが「信仰」だったので。従って「罪」とは彼らにとっては「契約違反・律法違反」のことを意味しました。

このような彼らの「契約」と「律法」の背景を知るとき、彼ら、特に熱狂的なイスラエル人、ファリサイ宗の人達、律法学者等にとっては「律法」を遵守することが一大事であったことが理解できます。

ちなみに、聖書とはこの「契約の書」なので「約」がついているのです。契約の民である彼らの宗教の教典に「約」が付いているのは当然のことです。

とにかく聖書の宗教は神とイスラエルの民との「契約宗教」だと言えます。問題は、その契約の内容の律法をどのように解釈するか、ということ。そのところでファリサイ派や律法学者(律法ヲ解説し教える者)達とイエスさまは異なっていました。ファリサイ

イ派やその派に属する律法学者たちは、端的に言えば律法は神との契約に基づいて神から与えられた言葉であるから「律法の言葉は即神の言葉」と受け、律法の一言一句（一点一画）を絶対とし、「人間の存在の窮極的根拠・支え」と理解したのです。そのような「律法」がすべての絶対的基準であり出発点だったので、ですから日常生活に於ける一挙手一投足を律法で自他を規制し、違反のないように努め教え権力で規制したのです。

ではイエスの律法理解はどのようなものだったのでしょうか。端的に言えば、イエスは「律法」が何処から生じ、何を証示しているのか」という律法の原点を見ておられ、その靈的命の現場から律法の文字（言葉）を観ておられたのです。フアリサイの徒は律法が秘めている靈的命を見ないで、ただ律法の文字（言葉）にしがみついたので、熱烈なフアリサイの徒であったパウロは改心後、自分の信仰を振り返り「文字は殺し、靈は生かす」「石に刻まれた文字に基づいて死に仕えていた」と告白しています。（コリントⅡ、三・六）フアリサイの徒と「律法主義・聖書文字主義者」だったのです。

イエスさまは、フアリサイ派の熱心な律法遵守の信仰の内に、ひそんでいる「魔」を見抜いておられた。その「魔」とは何か。体験者パウロは次のように告白します。

兄弟たちよ、私は彼らが救われることを心から願ひ、彼らのために神に祈っています。わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを認めますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです。ローマの信徒への手紙十章一節三節――

パウロは鋭く問題の正体を指摘します。フアリサイの徒の求道熱心は認めるが、その熱心さは的外れの熱心さだと言います。彼らは「神の義」を知らず、ただ「自分の義」を求めているだけだ、と指摘するのです。誠実そうに見える信仰心も求道心も、なんの事は無い。「自分が描いた信仰者の姿の自己実現の業にすぎない」と言うのです。そこには「自分の義（正さ）」の追求はあっても「神の義」は不在だ！と鋭く指摘します。

何と明解な批判でしょうか。おそらく、かつてのパウロ自身の深い反省から生まれた自己批判の言葉でもありません。 「神の義」を知らず「自分の義」を求めている。そこに律法主義者の聖書理解の「魔」があるのです。それは目的と手段との混同であり逆転です。宗教信仰は言うに及ばず、主義主張に生きる正義漢が陥ちる落とし穴です。神の義に従うはずの者が、従わねばと思う自分の情熱と熱心に比重がかかり、神が姿を消して、自分が、自分が、という自我実現（エゴイスト）の熱心に変わってしまったている。そして、その努力する自分を見て自分は安心する。それどころか、その自分を他人と比較して自惚れが生まれ、他者軽蔑の傲慢心の「魔」に陥ち込んでしまう。そこでは神は不在であり「自分の義」だけ、つまり自我実現の自己に陶醉するナルシシストがいるだけ、となる。

しかし当人にはその自覚がまったくない。このような熱心なユダヤ教指導者集団にイエスは十字架刑によって殺害されました。彼らは求道人ではなく、安っぽい鼻持ちならぬ独善的ヒューマスト“なのです。パウロはロマ書七章に於いて、かつての自分の求道の姿を赤裸々に告白し、その偽善の地獄から開放された喜びを語っています。

イエスはフアリサイの徒の偽善を次のように痛烈に批判された。その一例を紹介してお

きます。

禍いだ！、お前たち律法学者フアリサイ人よ、偽善者どもよ、お前たちは、人々の前で天の王国の扉を鍵で閉じてしまうのだ。なんと、お前たちは自ら入ることをせず、入ろうとする者たちを入らせないのだ。

禍いだ！、お前たち律法学者フアリサイ人よ、偽善者どもよ、お前たちは海と大陸を駆けめぐって、一人でも改宗者を作ろうとする。そしてうまく行った時は、彼をお前たちに倍するほどのゲヘナ（地獄）の子にしてしまうのだ。

——マタイ福音書二十三章十三節～十五節——

お前たち、律法（聖書）の専門家ども禍だ！、お前たちは、人々に重荷（担いきれない荷物）を負わせるが、お前たち自身は指一本でもそれらの荷物に触れようとはしない。

——ルカ福音書十一章四十六節——

注・「重荷」とは、「律法」（聖書の言葉）を守らなければ地獄行きだ！、と
言う「律法遵守の重荷」のことです。

彼らは盲人を導く盲目の道案内ともだ！。しかし、盲人が盲人の道案内をするなら両者とも溝に落ち込んでしまっただろう。

——マタイ福音書十五章十四節——

フアリサ派の先生たちは決して悪人ではない。が、自分でも自覚しないで、善人ぶり宗

教家がつてゐるから質が悪い。社会のどの分野にもこう言う人はいらっしやる。勿論、宗教の指導者といわれる者に多くおいでのよである。私自身、自らを省みるにやぶさかであつてはならないと思ひます。

それにしても彼らの何が問題なのか、もう一度自省を込めて見つめてみよう。パウロは、神の義を知らず、自分の義に関心を持ちつづけ、追い求めるところに問題がある、と指摘した。それは彼らが「神の義」を本来に直接経験していないからだ、と言つ。律法の根拠に目覚めないまま、その文字によりすがり、神の祝福に与かるに相應しい自分に成ろうと一心に情熱を注いだその在り方に問題があるのです。

彼らは、「神の支配・神の義」即ち、神の祝福が無条件に、律法以前にすでに自分の足元、否、自分の内に充満し躍動したぎつており、そのままの自分を生かしている、その創造的な大いなる命に気づいていない。神の救いは、自分が生きる出発点に設えられているのに、神の救いは自分が律法を守ることによつて到達点で与えられるものだと思ひ込んでいる。だから、その神の義を見ないで、自分自身をかつこつけることに熱心にならねば、自分は安心できない。だから、律法的生を捨てることが出来ないのだ。祈らねばならない、聖書を読まねばならない、礼拝に参加しなければならぬ。善行を、親切を、優しさを、と、捕らわれる、反面、それが出来ない自分に密かに悩む。結局エゴイズムから開放されないのである。最後はニヒルイズムに陥ち込むだけである。

結局、彼らの信仰や求道に決定的に欠けていたことは「真の自己否定がない」「ままで、単なる自己肯定に専心している」ということです。

人間は他の動物より勝っていると言われます。例えば人間は知性を持った者（ホモ・サピエンス）であり、また人間は物を用いて物を作りだす者（ホモ・ファールベル）さらに人間は言葉を語る者（ホモ・ロクエンス）などと言われます。しかし、だからと言って人間が万物の靈長であり、完全な主体性を持って生きる者ではありません。知性があるから、物を作りだす事が出来るから、言葉を語り自己認識が出来るから、人間は人間自身によって人間で在る、つまり自分の主人は自分であり何事も自己決定が出来る存在であると思うのは「歪んだ自我」が生み出した虚構です。

人間には限界があることを知れ、と言われます。しかし、それより大切なことは、この世に存在するすべてのもの違いは「差異」であって、優れているとか、劣っているとか、さらに価値があるとか、無いとかいう比較の優劣ではありません。一つ一つの植物、生物、動物は、それはそれとして有らしめられているのです。それらのすべては、自分でそのように成ろうと自分で決定してこの世に出てきたのではなく、自覚、無自覚に関係なく、それとは全く別に初めから、そのように有らしめられていたのです。その事実を「自己決定」対して「被決定」と言う方もいらっしやいますが、私は「創造に於ける自然」と申しています。その場においては、万物は皆平等“なのです。その場に、それがそれらしく先ず置かれている、ということが「めぐみ」であり「さいわい」ということであります。そこにこそ命の根元、存在の根拠があるのであって、その命の根元、存在の根拠を無視し、軽んじて、人間が何かを行おうとするなら、それはすべて“台無し”になるのです。

ですから、イエスは「まず、神の支配と神の義とを尋ね求め、見い出せ」と言われた意

味が領解できます。このような初めから神と結ばれている、そこに自己成立の根柢があるということに気づくとき、本当の自己否定が自ずと生じて来るのです。それは同時に、真にそれによって生かされ支えられている自分をそのまま肯定出来るようになるのです。ここでは、罪も救いも滅びも、括弧付きの神も仏も宗教もすべて相対化され無化されてしまふのです。その場を、いつも申します言葉で言えば、「スッカラカン、スッカラカン」なのです。つまり、鳥が飛び、花が咲き、雨が降り、太陽の光があり、夜が来て、朝が来る、人が生まれ、成長し、泣き笑いしながら生き、老い、そして死ぬ。それが「神の支配・神の義」なのです。「死んでも生きてても神の内」です。

「それをそれたらしめる」「恵みの支配が「神の支配」の働きですが、「神の義」が、それをそれたらしめる成熟への創造力の確かさ」のことです。言うならば「すべては必ずそう成る、成らしめられる」「自ずから然る」という確かさこそが「神の義」です。それは人間の願望でもない、要請でもない。人が寝起きしている間に、知らない間にそう成る。しかし、人はなぜそう成ったかは知らない、というのが先にイエスが語られた「成長する種の譬え」で証示された事でした。その根本的な命の躍動の姿を言語化したものが「律法」なのです。律法は命令でも倫理でも当為でもない。神の然り、であり否なのです。

人間存在の根本的なために開眼して、その在り方を弁えているのが「真つ当な自我」です。ですからイエスさまは言われた。

一切、誓ってはならない。あなたがたは、「然り、然り、否、否と言いなさい。そ

れ以上のことは、悪い者から出る。

——マタイ福音書五章三十七節——

「誓つはならない」とは、自我を先立たせるな、力むな、と言うことです。「然り、然り・否、否」とは、部分を見ないで、全体を見なさい。存在の根っこに、とうとう、悠々と流れる創造的な命の大河から目を離すな、目先の損得で分かったような理屈を並べ立て、自己主張をせず、「ただ花の開落を見なさい」とイエスは言われる。それらは気楽に暮らせ、ということではない。「それ自体で有る根源的な命のリアリテイが脚下にたぎっているではないか、目が見えても見えないのか、耳があつても聞こえないのか」これこそがお前の本当の支え生きる根拠だ。だから、心底で安心して現実の一つ一つに知恵深く対処して希望を持って生きなさい、その一点を見失うと、あなた迷う、と言われる。

ここで、繰り返しになります「神の義」を基本として「律法」そして「真つ当な自我」についてご一緒に話を勧めて参ります。

大いなる命の創造的な「躍動」そのコトを「神の義」と言うのです。それは、「神の義」という聖書の文字や教義的、神学的に解説して分かったとする観念的抽象的概念ではない。それは神秘としてのコトなのです。「神の支配」も「神の義」の働きも、構造主義的な言表をすれば、非通時的（原因と結果との関係による時間の流れとは無関係）であり、その働きは未完結で、非閉鎖的（一切の枠が無い）です。

つまり、「神の支配と神の義の創造的な大いなる命のたぎり」は、「初めも無く、終わり

も無い”そして永遠の「今・今」を創造し躍動している。このとてつもない命のたぎりを詩篇の信仰人は次のように詩い上げた。

もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はその御手の業をしめす。その日、言葉をかの日につたえ、この夜、知識をか夜の夜におくる、語らず言わず、その声きこえざるに、その響きは全地にあまねく、その言葉は地のはてにまでおよぶ。

— 詩篇 十九篇一節以下 —

先にも何度も申し上げましたが、人が決心するとか、知識や知恵を努力して行使するとか、それまでの経験や体験を踏まえてとか、いうことが人間の生きて行く基礎にはなり得ないのです。それは不要であるというのではなく、そのような自己決定は第二のことなのです。第二のことが第一になるとき、この世は忽ち病み、必ずバランスが崩れ、やがて崩壊してしまふ。歪んだ自我が闊歩するとき、この世は問題が問題を生み最後に自滅する。しかし、人間がその本当の命の支えに立ち帰ってみるとき、最初で最後の支えにならないものを本当の支えと信じてしがみ付いている自分の姿が見えてくるのです。とイエスさまは申される。

人間が、本当の支え、人生の窮極の支点、存在の根拠に立ち帰ったとき、自我の歪みが見えて来て、”悔い改め“が起こるのです。それが”自己否定“です。そして、自己否定は、神の義・神の支配への自我の参与であり、その生き方なり方が”真っ当な自我“によ

る自己肯定へ人を導くのです。この間の消息をイエスは「放蕩息子の譬え」で証示された。すこし長文ですが一緒に聞いてみましょう。

イエスは言われた。「ある人に二人の息子がいた。弟が父親に言った。『お父さん、ざいさんのうち、ぼくの分け前分を下さい』。父親は彼らに資産を分配してやった。すると、幾日もしないうちに弟は全てをまとめ遠い国に旅立ち、そこで放蕩な生活をしてじぶんの財産を使い果たした。彼がすべてを使い果たした時、その国を大飢饉がみまい、彼自身も困窮し始めた。そこで、彼はその国の住人の一人のところを身を寄せたが、この人は彼を自分の畑に送って豚を飼わしめた。そこで彼は、豚が食べているいなご豆で腹を満たしたいと願ったが、誰も彼に与えなかった。そこで彼は我に返って言った。『ぼくの父の雇い人たちはあんなに大勢いても、食べ物有り余るほどある。しかし、ぼくはここで、飢え死にしようとしている。立ち上がって、ぼくの父のところへ行こう。そして父に言おう。『お父さん、ぼくは天に対してもお父さんの面前でも、罪を犯しました。もはや、お父さんの雇い人の一人にしてください』。そして彼は立ち上がり、自分の父親のもとへ帰っていった。

さて、彼がまだ遠く離れていたのに父は彼を見つけ、憐れの思いに駆られ、走って行って彼の首を抱き接吻した。息子は言った、『お父さん、ぼくは天に対しても、お父さんの面前でも、罪を犯しました。もはやお父さんの息子と呼ばれるに相応しくありません』。しかし父親は、しもべに言った、『急いで極上の衣服を出して来てむす

ここに着せなさい。そして指輪を息子の指にはめ、足に革ぞうりを履かせなさい。また肥えた子牛を牽いてきて屠りなさい。そして食べて祝宴をあげようではないか。私の息子は死んでいたのにまた生き返った。失われていたのに、見つかったのだから」。

こして彼らは祝宴を始めた。

——ルカによる福音書十五章十一節—二十五節——う

この本文は、元来二人の息子の話ではなく、それぞれ独立した話であったものを、一つの譬え話に編集したものだと言います。それはともかく、ここでは先ず前半の弟と父親との物語を取り上げ、兄と父親との物語りは後で学ぶこととにします。

イエスさまがこの譬え話で証示しておられることは、「父と息子との関係」即ち「神と人との関係」です。神と人間とがどのように結ばれているのか、即ち、神と人間との原関係を証示しておられるのです。その原関係を分節しますと「神の支配」「神の義」となるのです。先に学びました「成長する種の話」や「善悪に関わらず、すべてのものに太陽を照らし、雨を降らしてくださいさる話」など、想い出して下さい。つまり、イエスは人生の窮極の支点、根拠「自己成立の根拠に躍動し、たぎる大いなる命の支え」の一点を、この「父親と息子との話」で証示しておられるのです。

そこで、ここでもそうですか、この譬え話には「贖罪も終末論的な裁き」もありません。特に贖罪信仰は、イエスをキリスト（救い主）とした原始教団に於いて発生し、パウロによって深められたキリスト論であって、神の支配を説いたイエスの信仰に、パウロの信仰を読み込んではいらないと思います。勿論、新約聖書はイエスの信仰とパウロの信仰とが

(厳密に言えばヨハネの信仰)とが混在しており、それらをどのように統一理解するかということが「新約聖書学」の問題点であることは今更指摘するまでもないことです。

とにかく、イエスさまの信仰はイエスさまの信仰に即して解釈されねばなりません。その意味で、イエスが語られた譬え話をその視点で解釈することは大切なことです。

前置きは、これくらいにして、父(神)と息子(人間)との関係で二人の息子(人間)の在り方、生き方を見ることにしましょう。先ず、弟の生き方・在り方を一緒に見つめてみましょう。

彼の自己理解は「歪んだ自我」の在り方です。「自分は自分によって自分なのだ」と言う在り方を彼は持っています。ですから、お父さんに、自分が受けるべき財産分与を彼は子としての権利として要求します。そして受けた財産の使い方も自分で決定し自分のために用います。彼は自信満々で、今まで寄り所としていた父の家を出て行きます。「自分の主人は自分であって他の誰でもない」という自我の主体性の主張です。彼の思惟は合理的です。彼は自分の将来像を自分で描き、その希望を実現すべく人生の直中へ出て行きました。まさに、自我中心的な行き方の典型だと言えます。

しかし、彼は二つの「現実」に直面します。一つは干ばつによる飢饉、一つは歪んだ自我が構成する人間社会です。彼はこの二つの現実^に直面して、彼の自我をフル回転して対応を考えます。歪んだ自我は、自己保身的な自我です。自我の面子(めんつ)を保つため自分を立てようと画策するのです。その意味で自我はエゴイズムとそれを支える知恵です。彼は考え、豊かに食料がある父の所へ帰ることによって自己保身(自我確立)を画策

します。つまり、自己保身のためなら、何でも利用し、何とでも言って合理化しようとする、これが「歪んだ自我」の本音なのです。

彼は父に言うべき恰好(かっこう)よい言葉を考えます。このところをイエスは次のように彼は語ろうと考えたと記しています。「父のところへ行つて私は言うことにしよう。お父さん、ぼくは天に対してもお父さんの面前でも、罪を犯しました、もはや、と父さんの息子と呼ばれるにふさわしくはありません。ぼくをお父さんの雇い人の一人のようにしてください」と。

彼は恰好(かっこう)よい保身の言葉を心中に抱き父の所へ行くことにしました。しかし、彼の「歪んだ自我」は、父によって撃破されるのです。その様子を次のようにルカは描いています。

「さて、彼がまだ遠く離れていたのに父は彼を見つけ憐れのおもいに驅られ、走つて行って彼の首を抱き接吻した。息子は言った「お父さん、ぼくは天に対しても、おとうさんの面前でも、罪を犯しました。もはやお父さんの息子と呼ばれるに相応しくありません」。しかし父親は、しもべに言った。「急いで極上の衣服を出して来て息子に着せなさい。そして指輪を息子の指にはめ、足に革のぞうりをはかせなさい。また肥えた子牛を牽いて来て屠りなさい。そして食べて祝宴をあげようではないか。私の子は死んでいたのに生き返った。失われていたのに、見つかったから」

この場面は、新約聖書の中でも感激する代表的な場面です。しかし、感情だけでこの場面を読み過(こ)し「神は愛であります」と声高に語り、また受け取ってはならないと思いま

す。

いったいここで何が起こっているのでしょうか。息子が気づいた最大で根源的なことは、父と（神）自分（人間）との結びつきが、初めから有り、父（神）の命の中で父（神）と一体に活かされていた自分（人間）の存在の真実（リアリティー）に開眼したことです。「神と人との一体の原関係」への気づき、バルトや滝沢氏の言い表しで言うなら「神、我らと共にいます（インニエール）の原事実」への開眼なのです。その現場では自我の一切の計らいは「無」となるのです。その現場では「宗教も信仰も罪も滅びも救いも無い」のです。人間は初めから創造的な大なる命のたぎりの現れとして存在させられていたのです。言うならば、息子は、初めから、お父さん（神）の息子（人間）をそれとして活かそうとする義、即ち「神の義」につつまれていたのです。その意味で、この譬え話の主題は「神の義・神の支配」なのだと言えます。場面場面のいづれに於いても父（神）の思いが息子の思い計らいより先行しています。例えば、息子を生み育て、財産を分与し、出て行くことを許し、放蕩にふける息子を日々案じ、帰ってくる息子を先に見つけ、身体が必要とする以上に物を与え、何一つ吐責することなく、最大の歓迎をして、ただ喜ぶ。このリアリティーが「神の義・神の支配」なのです。

父（神）は、息子（人間）を絶対肯定した。このリアリティーを「神の愛（アガペー）」と言うなら、その愛は畏怖に充滿した神秘の力と言うほかありません。ですから、「パウロ」は、それをイエスを通して現された「キリスト」で直接経験し、次のように告白した。

キリストの愛がわたしに迫ってくる。——コリントⅡ、五章十四節、

「迫ってくる（スネコオ・しっかり捕まえて攻めてくる）」

息子は、このような父の愛に包まれたとき、自ずと「歪んだ自我」は消えて無くなり、気がつく、「真つ当な自我」、つまり、神の義に開眼し、その義に支えられた自我、が彼の身体（からだ）に自然化したのです。そのとき、彼は彼らしく、そのままの彼で、人生のさまざまな山河に雄々しく対応し生きて行ける、生きて行こう、という生きる安心と勇氣を得たことでしょう。

真の自己否定無き自己肯定は所詮「歪んだ自我」の世界内の虚構であり最後は虚無で終わります。真の自己否定は、自我の努力や反省によって生ずるものでは有りません。自我の努力や反省に於いて生ずる自己否定は、所詮自我による産物であり、それは自己肯定の一種だと言えます。

では、どのようにすれば真の自己否定は成るのでしょうか。それはどうすることも出来ません。自分を自分の力で持ち上げようとするのと同じです。どのような力持ちでもそれは出来ないのと同じだからです。真の自己否定が無きところに真の自己肯定は成り立たないのです。それが出来ると思ひ込んでいたのが二人の息子の生き方でした。しかし、弟はその在り方の誤りに気づかされたのです。彼は自らの知恵と努力で気づいたのではなく、先述のとおり、父の絶対的な愛に初めから息子の如何に関わらず保持されている自分の存在に覚めが彼を気づきへ促したのです。それが自己の存在の根拠を直接経験すると言うの

です。悔い改めとは自己反省ではない。自己反省は歪んだ自我の自己肯定の作業の一つです。「心を貧しくする」とは徹底した自己否定へ促す「神の支配・神の義」に開眼させられることにより、その者の内で芽吹かせられるのです。外から与えられるのではありません。既に初めから神人一体の原関係が復活するのです。ですから息子の父は言いました。死んでいたのに生き返った。(アナスタシス・復活した。本来のものとして立ち上がる) 失せていたのに見い出された。(ユウリスコー・本来あつたものを見い出す)

—ルカ福音書 十五章二十四節—

イエスはキリスト教という一つの宗教を語り勧めたものではありません。人が人らしく成ること、人が本来の自己の全人格的な在り方を回復することを願ったのです。それは、その人がその人らしくなり、そのまま一つとなるような相補性の、まさに自然性の回復だったのです。「創造に於ける人間の自然」と私は言表しています。

話を「放蕩息子の譬え」に戻し、後半の兄の言動に注目し、この項を終わります。

さて、兄は、畑にいたが、家に近づくと音楽やと踊りの様子が聞こえて来た。そこで召使を呼んで、あれは何事かとたずねると、召し仕えは言った。「あなたのお父さんが帰ってこられました。そこであなたのお父さまは、無事な姿の弟様をお迎えになられたので肥えた子牛を屠られたのです」。彼は怒り、中に入ろうとはしなかった。すると父親が出て来て彼をなだめた。彼は父親に言った。「ご覧なさい、ぼくはこんなに長い年月お父さんに仕えています。それにお父さんの掟は何一つ破ったことがない

てしよう。それなのに、僕の友達と宴会をするために、子山羊一匹だつて下さったことがないではありませんか。ところが、あなたの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの資産を食いつぶして帰ってくると、肥えた子牛を屠ふつておやりになる」。父は言った。「子よ、お前はいつも私と共にいるではないか、だから、私のもの一切は、おまえのものだ。だが、お前の弟は死んだのに生き返った。失われていたのに、見つかったのだ。祝宴をあげて喜ぶのは当たり前ではないか」。

——ルカ福音書十五章二十五節—三十三節——

イエスは世間話をしておられるのではない。神と人間との関わりを譬えで証示しておられるのです。この譬えは兄と弟の関係を語る事が主題ではない。父（神）と弟（人間）、父（神）と兄（人間）との関係が主題です。そして、イエスの願は、「人が本来の自己の全人格的な在り方」の回復ということです。つまり、その人がその人らしく成るといふことにつきます。その願い心を日本の古い歌に託しているなら、「人、多き、人の中にぞ、人ぞ無き、人、人となれ、人と成せ」ということになります。人の漢字は二本の棒が互いに支えあつて立っているように見えます。人という漢字が人の姿を象形したのかは知りませんが、人という漢字を眺めていますと、よくバランスがとれていて安心します。それは支え合うそこに、人の本来の自己の全人格的な在り方が表象されているからでしょう。また人間という文字は、昔、中国では社会のことを言い表したものだど、若いころに和辻哲郎氏の古典的名著「人間の学としての倫理学」という小冊子で読んだことがあります。

人と人との間に社会が出来る、というのは納得します。しかしその場合にも、人が自己中心の生き方をするなら、“人”という漢字も、社会を意味する“人間”も成り立ちません。今日の日本人の生き方、人間の在り方を見ていますと、人も人間（社会）も健全には成りたないのでは、と思いますのは、私ひとりではないでしょう。とにかく、その原因は多くあるでしょう。しかし、結局、人が本来の自己の全人格的な在り方が歪んでしまった、または、そこから脱落してしまった、ということにあるのではないかと思うのです。それは真の自己成立の根拠を見失い、自我が自我の根拠となってしまうからではないでしょうか。そのため、自我の根拠である自我をいつもこの世の何かに頼って補強しなくてはならず、それが権力や金銭や名誉やあらゆる快楽、暴力などによって自己主張したり、自己の存在を確認することで、自分が自分なのだ！、と安心するほかないのではと考えます。6かし、それらは所詮、消えて無くなるもので、最後はさきに紹介した豊臣秀吉の辞世の歌のように「露と消えて」行くしかないようです。結局、人生の決算は“虚無”となります。

前置きが長くなってしまいました。兄さんの方に注目しましょう。

二人の息子達は、基本的には「歪んだ自我」に生きていた人達です。その意味で私たちと少しも変わった生き方をしている者だとはいえません。しかし、その生き方にも色々な形が在るようです。弟は自由奔放型、しかし兄は謹厳実直型のようにです。

イエスは生の直接性を証示された。“生の直接性”とは存在しているものがどの様になるか、と言うことではなく、存在自体のことである。“存在しているもの”はいろいろな

様態をしており、見えるし、言葉（知識）で説明もでき、価値付けができ分別します。例えば、誠実な人、悪性な人とかに分別します。その場合、悪性な人より誠実な人のほうが立派な人格の持ち主だと評価されます。しかし、イエスは言われるものではありません。それは、大地に根づいてさまざまな植物が存在していますが、その個々の植物の様態は、それぞれの差異性であって、それれ等を価値付け意味付けるのは人間の分別知であって、そのもの自体を見ているわけではありません。価値付けされ意味付けされた個々のものは、人間の觀念が作りだした虚構であり、幻想なのです。そこには何の実体も無いのです。すべての植物は大地という場から芽吹いて来たものであって、恵まれた存在者（個々のもの）なのです。人は、そこに現れた存在者（個々のもの）だけしか見ず、それがそのものだと思いついでいます。それはまさに「人間の思い込み」が作った幻想、虚構なのです。しかし、イエスは、大地その場から、そのものを見られるのです。それを根原思考といえます。「生のゼロ点」と言った人がいます。それは「人間存在の窮極の根拠」つまり「神の支配・神の義」の「大いなる創造的な命のたぎりの場」なのです。その場では、善と悪、価値と無価値、人生の意味と無意味が消えている、否、超絶されているのです。一切の対立が無化されている場、その命の場からイエスは発語なさり、この世を見ておられる。私はその場を「スッカラカンノ、スッカラカン」と言っているが、まさにその場が神なのである。そこには虚無はない、虚構もない、ただあるがままの世界、厳密な意味での「天然自然」があるのです。その創造的な大いなる命のたぎりに開眼することが、「生の直接性」気づく

ということなのです。そのような自我を「真つ当な自我」と言うのです。その時、一切の力みが消え、真の生きる勇氣、生きられる力、生きて行こう、生きて行くのだ、生きるとはなんと素晴らしいことなのか！という、積極的な生き方が生まれてくるのです。

しかし、先の二人の息子は、この生の直接性を知らないままで、それぞれの形で自己主張、自己肯定的生を生きていましたが、最後には共にニヒリズムに陥ち込んでしまいました。それは「わたしは私によってわたしなのである」という、自我に自分の生の根拠を置くエゴイストの結末だと思えます。

しかし、弟の方は、父（神）に出会い、真の命の根拠、つまり「自己成立の根拠に臨在する神の支え」に覚すること（生の直接性に開眼すること）により、幻想的な自己肯定が否定され、真の自己肯定的生を与えられたのです。まさに、「死んだのに、生き返った。失しなわれていたのに見つかった」のです。だが、兄の方は、神と人と一体の原関係が自己の生の現場に、初めからあり、その命たぎりに包まれていながら、それに気づくことができず、なお、自分が描き願う自分に成るべく自分を自縛するエゴイズムから抜けきることが出来なかった。また、自分が描く人間の正義（自分の義）に自分自身を奴隷のように従属することにより自他の善悪を計った。その兄の「歪んだ自我」の様子が、弟を口汚吐する態度と父との対話にあらわれている。

兄は父に言った「お父さん、考えてみてください。私は長い年月お父さんに仕えて（ドウレイウオ・奴隷として仕える）います。それに、お父さんの言いつけ（エント

レ・掟、定め・戒め）に背いた（パレルコマイ・視界から過ぎ去る、違反する）ことはなかったではありませんか！。……………

このような兄の生き方は、フアリサイ派の熱狂的律法主義信仰人とそっくりの生き方です。それは善悪のことではなく、まさに「歪んだ自我」の自己貫徹の生き方です。それに答えて父は言った。

息子よ！、おまえはいつも私と共にいる（メト・私の中に一緒）ではないか。わたしのすべてのものは、あなたのものではないか。……………

この「放蕩息子の譬え」は、イエスさまが付けた表題ではありません。それぞれ聖書を翻訳した委員会が合議の上で付けた表題です。この度、この譬え話を聴いて来て、その内容は、父の元を離れ放蕩した弟の話ではなく、“二人の息子と父の譬えはなし”であり、それは人間と神との関わり、つまり、現存者としての人間が窮極の根拠、支点を失った在り方が行き着く虚無から、どのようにしたなら開放され、救い出されるか、ということを示した譬え話であることに気づくのです。

最後に、父が兄に語りかけた言葉は、イエスが提示した「神の支配・神の義」そのコトであり、それは人間存在の根源的事実（リアリティ）そのコトにはかなりません。

「息子よ！。おまえは、いつも私と共にいるではないか。」これこそが人間知性には隠

れた真理なのです。私たちが、どのようににその知性でもって考え、この世のすべての宗教がどのような教典で説き、どれほどの偉大な教義体系を作ろうとも、それらとは、別に生の直接性の現場にたぎる創造的な命は、どの人にも、どのものの元にも非通時的に、元始めから有り、今あり、未完結として創造的にたぎりつづけているのです。この命の事実、つまり「神人一体の原関係」に歓喜をもって賛美し、それゆえに、勇気を頂いて今、今を生きてまいりたいと願います。その生きざまを私は「創造における人間の自然」と言い、結局イエスはこの「創造に於ける自然」を証示されたのだと思っています。

最後に、表題の「神の知恵と人の知恵」について一言付け加えます。「神の知恵」は「人の知恵」即ち「人間の心と行とが滅した処」（心行処滅言語道断）のそこに現成して来るのです。イエスはその間の事情を、「幸いだ！、心の貧しい人、神の支配はその人達のものです」、と言われた。「心の貧しい人」とは「自らの知恵と努力を、神の前に全く捨て去る人」という意味です。つまり、一切の計らいを捨て去ったそこに、神の知恵がおのずと、人の内に現れて来るのです。その事を道元は次のように言いました。「仏法を習うというは、自己を習うなり、自己を習うというは、自己を忘るるなり、自己を忘るるといふは、万法に証せられるなり、万法に証せられるというは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり。」（正法眼蔵現成公案）

要するに道元は、仏法（神の支配）を習うとは自己を徹底的に忘れ、捨て去ることであり、そのように捨て去ったそこに神の支配（命のたぎり）が現れてくる、と言う。言表は

異なっても、イエスと同じことを道元も言うのです。

現成して来た神の知恵（支配）は、人間の知恵（言語）によって語り、示すことは出来ません。人が「これが神の知恵である」と言うなら、それは、その人の意識、認識、主観の内に抱え込み、解釈し、消化した「神の知恵」なのです。その意味で「神の知恵」は無限に人には隠された神秘、奥義・不可思議であると言えます。つまり言語道断なのです。

さらに、神の知恵を語るテキスト（例えば聖書の言葉）の理解も永遠に隠された秘密なのであり、加えて言えば、聖書そのものも、既に、解釈されたものなので、聖書が証示する命の世界の文字を、即神の言葉と信じ、唯一の絶対的真理として出発することは、してはならないし、出来ないことです。ましてや、教会で語られる牧師の説教が「神の言葉である」などと言うのは、中世の権威主義的カトリック教会の亡霊である。それは歪んだ自我からの発想だと言える。

ここで、ドイツの神秘思想家であったタウラー（一三〇〇〜一三六一）の有名な言葉を紹介しておきます。（タウラー—全説教集 行路社・キリスト教神秘主義著作集 教文館）

「いと高き業を尋ねる事なかれ。汝自身の底へおもむき、汝自身を知るべし。隠れたる神の神秘・流出・流入・無の中の有につきて尋ねる事なかれ」。

タウラーは、エックハルトの弟子であり、ドミニコ会で修行した。カトリックの敬虔主義に大きな影響を与え、宗教改革者ルターへの信仰にも強い感化を及ぼしたと言われています。神の知恵（神の支配・神の義）は、非通時的（原因と結果との関係による時間の流れとは無関係）であり、その働きは未完結で非閉鎖的（一切の枠が無いの）です。

パウロは求道の最後に、この、計り知れぬ創造的な神の知恵（命・キリスト）こそが自己の生の窮極的根拠であり支えであることに開眼した。そして、この人神一体の原関係のリアリティーを歡喜して語ったのが次の言葉です。

“キリスト我が内にあり、我れキリストの内にある、生きるはキリストである”

ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか！。だれが神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせようや！。

——ローマの信徒への手紙十一章三十三節——

注・1、「おまえは『いつも私と共にいる』ではないか……」この文脈はマタイ二十三節の「神が私たちと共にいます」、その名はインマヌエルと言われる」と同じです。。

2、「こころが貧しい（プトコイ）とは、自らの心において神の前に無一物となる人、ということである。

2、この冊子は、今年六月に名古屋西キリスト教会で行われた一日「あごらの集い」のために作られた冊子に、説明を加え全面改定して製作したものです。尚、これは未完であつて後日つつぎを加える予定です。

(二〇〇八年九月一〇日)